

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 27 日現在

機関番号：34514

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24653205

研究課題名(和文) POSITIVE FOCUS面接が要介護高齢者のWELL-BEINGに及ぼす影響

研究課題名(英文) Effects of positively focused interview on psychological well-being in the disabled elderly

研究代表者

末田 啓二 (SUEDA, Keiji)

神戸親和女子大学・発達教育学部・教授

研究者番号：30216270

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：positive focus(PF)面接は被面接者の肯定的側面に注目したり、被面接者の反応に対して肯定的解釈や説明を加える面接技法である。

本研究は施設入居高齢者の心理的適応や主観的幸福感(well-being)を促進する面接技法としてPF面接を実施し、その有効性を検討した。その結果、自尊感情尺度得点に関しては、8セッションの面接前後でwell-beingが増加傾向を示したが、統合性尺度などでは有意な変化が見られなかった。また面接時の態度評定も一義的变化が一部を除き示されなかった。今後は事例研究から面接効果を確認すると共に、本面接技法が家族間で適応可能かを検討することが必要である。

研究成果の概要(英文)：Positively focused interview(PFI) is based on the theory of positive psychology, and interviewers focus on positive traits of interviewees or respond positively.

The purpose of this study is to investigate that PFI is effective on psychological well-being of disabled elderly. The major findings were as follows: (1) after eight sessions of PFI, Self-Esteem Scale(Rosenberg) score increased. (2) but other well-being scales (PGC Moral Scale and Erikson Psychosocial Stage Inventory) indicated no increase in scores. (3) The positive attitudes of elderly to interview became partly increased. As mentioned above, the effects of PFI on well-being were not necessarily clear. Finally, implications and suggestions for future research are discussed, in particular, concerning the importance of case studies and usefulness in family counseling.

研究分野：老年心理学

キーワード：positively focused well-being 要介護高齢者 介入効果 ポジティブ心理学

1. 研究開始当初の背景

(1) 高齢社会の現代にあって、長寿よりも高齢者のQOLやwell-beingが重視されている。successful agingやproductive agingに関する環境要因に関する研究が多い。介護予防の観点からも社会的要請が高まっている。

(2) 本研究の前身は「教える」行為が高齢者の心理的適応を向上させるかに関する実証的研究である(末田他、2008)。高齢者の社会的役割や家庭内での役割の減少に伴って、「教える」機会が減少した今日、「教える」行為が自尊感情や主観的幸福感など、心理的well-beingの向上に結び付くのかを検討し、一部分ではあるが、両者の関係性が実証された。

この結果、高齢者のwell-beingの維持・向上には自尊感情や自己価値、自己効力感など、個人の肯定的自己概念あるいは肯定的自己イメージが大切である事が示唆された。

(3) これまでポジティブサイコセラピー(PPT)やポジティブ焦点づけ介入(PFI)の有効性や有用性については多くの臨床事例が示してきたが、クライアント個人のポジティブな側面に焦点を当てる療法は極めて少ない(Seligman, 2006)。

2. 研究の目的

(1) 本研究ではポジティブ心理学の視点から、施設入居高齢者のwell-beingの維持・向上を目的として、ポジティブフォーカス面接(介入)を実施し、その介入効果を検討する事を目的とする。本研究で用いるポジティブフォーカス面接(PF面接)は、個人のポジティブな特性(得意なこと、ほめられたことなど)に注目したり、個人の固有なポジティブライフイベント(楽しかったこと、感動したことなど)に意味づけしたり強調する応答を特徴とする。

(2) 従来の研究のほとんどが事例研究を中心とした質的研究であり、本研究ではwell-beingの指標となるいくつかの評定尺度を使って介入効果を検証する量的研究である。高齢者に対しても自記式の尺度を使った量的研究ができるかを確認する。

3. 研究の方法

(1) 対象：施設入居高齢者50名、男性12名、女性38名(69-98歳)。3群に任意に分割(PF面接群15名、自由面接群15名、対照群20名)。4施設の職員の判断により、面接や聞き取り調査が可能で、意思疎通が可能な高齢者。

PF面接群：PF面接、ポジティブな側面に注目。自由面接群：通常の面接、1週間

の出来事についての面接。対照群：面接なし。

(2) 面接回数(面接群のみ)：原則として毎週1回4~50分程度の個別面接、連続計8回。

(3) 面接場所：施設内の自室。相部屋の場合は応接室。

(4) PF面接群の面接内容：共通テーマ「幸福な私」-アルバムの制作(最終回に面接記録として本人に寄贈。)

各回の設定テーマは以下のとおり。

1回目~4回目 私の好きなもの-好きな食べ物、好きな歌、好きな遊び、好きな人

5回目~8回目 楽しい思い出

子どものころ、青春時代、中年のころ、現在

毎回得意なこと、自慢できること、ほめられたことなどのエピソードを引き出す。出来るだけポジティブな言い換えや解釈での対応。

(5) 自由面接群の面接内容

毎回の面接テーマは任意、過去1週間の出来事、感じたことなどを話の糸口とし、その後は自由な話題。なお両群とも毎回、前回の面接内容の確認、写真撮影(アルバム作成のため)

(6) 面接者：女子大学院生または在学生(毎回同じ面接者が担当。)9名

(7) well-beingの評定：

面接期間をはさんでの事前事後調査、対照群は面接がなく、以下の諸調査のみ実施(3群共通)。

3群とも同一調査を実施。さらに面接2群は1ヶ月後に3回目(同一内容)を効果の持続性を確認するために追跡調査する。

(8) 調査項目：well-beingを評定する尺度としてPGCモラルスケール

(Lawton, MP) 自尊感情尺度

(Rosenberg, M, 1965) 統合性尺度(EPSI, 中西ら, 1987)を選定した。

(9) 調査担当者 面接者とは別に上記調査のみを担当する女子大学院生または在学生(3回とも同じ調査者が担当)9名。本来は自記式の尺度であるが、本研究では調査者の個別の聞き取りによる回答を求めた。

(10) 面接態度の評定：面接者が毎回面接終了後に被験者の態度評定を実施。評定項目は表情、発言量、応答性、話題への関心度、面接者への感情、積極的関与度の6項目、5段階評定である。なお最終回では面接の全体的印象や感想などを面接者が口術筆記した。

4. 研究成果

得られたデータは以下の3つに分類できる。

well-being 関連の測定尺度：PGC モラールスケール、自尊感情尺度、統合性尺度。各尺度は面接前後と1カ月後の追跡調査の計3回実施。

面接態度の評定、計8回の面接時の評定点、それぞれ6項目。

面接終了後の被験者の感想（口述筆記）。本研究では主に と を分析した。

(1) 各尺度得点の分析結果

自尊感情尺度得点の面接前後での変化を図1に示した。

群(3) × 回数(2)の2要因分散分析の結果、群、回数(面接の前後)の主効果がなく、交互作用のみ有意であった。PF群における面接前後の得点の増加は、他の群(自由面接群、対照群)に比べ有意に大きかった。したがって自尊感情に関してはPF面接がwell-beingの向上に有効であったといえる。

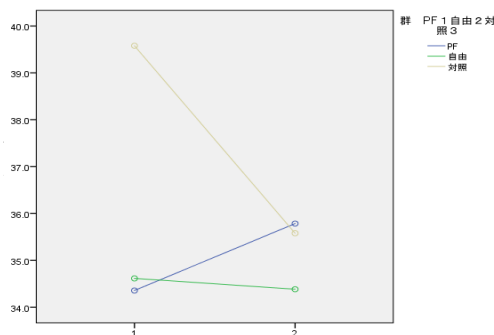


図1 面接前後の得点変化

しかしながらPGCモラールスケールとEPSI得点の面接前後における変化に関して、自尊感情尺度得点と同様の分析を行ったが、いずれの尺度得点にも交互作用がなく、PF面接のwell-beingへの効果は認められなかった。

以上の結果からwell-beingの尺度によるPF面接の有効性に関しては一貫した結果が得られなかった。

なお追跡調査においても尺度の違いによる結果の不一致があり、尺度によっては面接直後よりも得点が増加する場合もあれば(EPSI)、変わらない尺度(PGCモラールスケール)など、系統的な変化が得られなかった。

(2) 面接態度の評定値の分析

面接態度評定項目別の特徴

図2は高齢者の表情得点の面接回数別推移を示した。表情得点の変化をみると、自由面接群に比べ、PF面接群は面接の初期段階で大きく増加している。これに対して自由面接群は面接の後半に急増している。このような傾向は発言量や応答性、面接者への感情などほとんどの項目に共通している。したがってPF面接の方が、面接のより早い段階で面接者とのラポールが形成されることを示唆している。

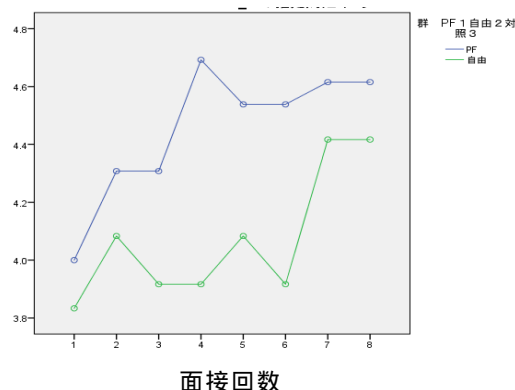


図2 「表情」得点の変化

面接態度合計点の回数別変化について図3は6つの評定項目の合計点の変化を示した。

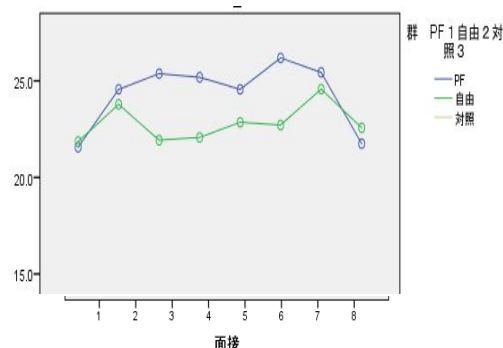


図3 各面接回の6項目合計点

回数と群の2要因分散分析の結果、回数の主効果と回数 × 群の交互作用(5%水準)が見られた。上述の結果と同様、合計点においてもPF面接群がより早い時点でポジティブな面接態度が生じていることがわかる。

面接態度評定の結果は定性的分析に留まったが、6つの面接態度の項目の内いずれの側面においても、PF面接が面接初期の段階で面接者への肯定的感情や態度が形成される傾向にあることが明らかにされた。

< 引用文献 >

末田啓二・酒井敦子・菊池信子・丸山総一郎 高齢者の「教える」行為が自らの心理的適応と社会的態度・行動に及ぼす効果

2008 平成 17 年度～18 年度科学研究費補助金(萌芽研究;課題番号 17653083)研究成果報告書

Seligman, M.E. 2006 Positive psychotherapy. Behavior Research and Therapy, 25, 1-24.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

末田啓二、高齢者へのポジティブ焦点づけ介入(PFI)とwell-being維持・向上への効果
ポジティブ心理学の視点からー 神戸親和女子大学研究論叢、査読無、48巻、2015、11-19.

末田啓二・藤田裕一、我が国におけるアニミズム心性に関する心理学的研究の現状と今後 高齢者研究科ら見えてくるものー、神戸親和女子大学研究論叢、査読無、11巻、2015、9-14.

末田啓二・菊池信子・丸山総一郎、高齢者のPositive Focus的対応と介護予防 社会福祉学・老年心理学・精神医学からの提言、神戸親和女子大学研究論叢、査読無、47巻、47-57.

伊東由美・末田啓二、Positive Focusが在宅高齢者のWell-beingに及ぼす効果、神戸親和女子大学研究論叢、査読無、10巻、49-61.

末田啓二・菊池信子・丸山総一郎、高齢者のWell-beingに及ぼすPositive focusの効果に関する研究 各領域からのアプローチ、神戸親和女子大学大学院研究紀要、査読無、9巻、1-10.

[学会発表](計 1 件)

末田啓二・藤田裕一、アニミズム心性は世代間で異なるか? 日本発達心理学会 24 回大会(東京)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

末田 啓二(SUEDA, Keiji)
神戸親和女子大学・発達教育学部・教授
研究者番号: 30216270

(2) 研究分担者

菊池 信子(KIKUCHI, Nobuko)
神戸親和女子大学・発達教育学部・教授
研究者番号: 00204834

丸山総一郎(MARUYAMA, Soichiro)
神戸親和女子大学・発達教育学部・教授
研究者番号: 70219567

(3) 研究協力者

施設関係
社会福祉法人養護老人ホーム鈴蘭台荘:
宮崎 光子、室 恵子
社会福祉法人ケアハウスさん舞子神港園
今西 博雄、佐野 孝子
社会福祉法人ケアハウスカトリア神戸
高階 和洋、荒川千鶴子
特別養護老人ホーム六甲の館
溝田 弘美、日和佐祥平

院生・学生(面接・調査担当)
院生; 大西 清加、奥谷 光、則本加奈子
学生; 佐藤みゆり、樽屋 瞳子、田中沙代子、川崎 静香、岩下 奈未、九鬼 聡美、中村 彩恵、岡 三穂子、小 藪 倫子、後藤 成美、北見亜梨奈、小西 尚美、成久 千尋、山本 朋子、山名 育美